

# 特集 文学教材で何を教えるか

## 美味しい小説 — 小説が教材になるまで —

安田正典

すぐれた料理人のように

すぐれた料理人のように、素材の味を活かし、食べる人の口に合う程よい大きさを、甘いものは甘さを、苦いものは苦さを、硬いものは硬さを、軟らかいものは軟らかさを失わぬように、程よく手を加え、美味しい小説を、香りもそのままに生徒の前に差し出したいと、常々思っている。そして、できればその小説を、厨房から漂ってくる匂いに引きつけられた子どもたちが期待のソースを準備して待つように、私たちの教室の生徒達もまた、待ち受ける未知の味に胸ときめかせて、お腹すかせて待つようでありたいと思っている。どうすればそんな料理を生み出せるか。どうすればそんな料理人に

なれるか。

なぜ自分はその小説に惹かれるのか

なぜ自分はその小説に惹かれるのか — 私の料理人への道はいつもこの問いから始まる。他の小説ではない、その小説の魅力を解き明かさなければ、美味しい小説の授業はできない。そして、その小説の魅力、面白さを解き明かすためには、一読者としての私の感じ方を徹底的に追究しなければならぬ。好みも含めて、私は私自身を知らなければならぬ。そうでないと、私は私を、その小説を面白く感じると、私は私を、その小説を面白く感じる私を生徒達に語る事ができない。そして、私が私を語ることができなくて、どうして生徒達とその小説の面

白さについて語り合うことができるだろう。考えてみれば、わがままな道ではある。しかし、料理人の道は、栄養士の道や食品分析の道とは違うはずだ。もちろん分析的視点は欠かすことができないが、分析だけでは美味しい料理は作れない。料理人は自分の舌を信じるものだ。舌を信じ、舌の言葉を知らなければならぬ。まず自らに問いかける。なぜ自分はその小説に惹かれるのか。その小説の面白さはどこから生まれるのか。以下、教科書に取り上げられている小説を例に挙げて、一読者としての私の感じ方を提示し、本稿の読者の参考に供したいと思う。

### 角田光代「ランドセル」の場合

角田光代の「ランドセル」は、主人公（二十七歳の「私」）が、幼稚園児の頃の自分を回想し、その頃の自分と対比する形で現在の自分について語る小説である。内容的には難しいところのない、謂わば「二読で内容を理解できる小説」である。この手の小説は厄介である。「分かり易すぎる」からだ。一見、何も教えることがないように見える。だが、本当にそうか。私は、そうは感じなかった。そこで私は次のようにこだわってみた。

この小説の面白さは、「子ども」はまだ物事がわかっていない存在であり、「大人」はわかっていながら存在であるという世の中の常識を逆転させ、「子ども」は「大人」が思っている以上に自分のことも周囲のことも「わかっていいる」ものだし、「大人」は自分で思っているほど「わかっていない」ものなのだ、少なくとも自分はそうだった、という語り方のユニークさにある。(対比)は細部に及び、徹底している。そこにこの作者のユーモアがあり、語られている「絶望」とは裏腹に、作品自体は明るく健康的である。そしてその(対比)の中に変わらぬ「私」、「ランドセル」を背負う「私」が立ち上がる。私(筆者)はその語り方に魅力を感じた。この小説は、出来事の語られ方に着目すべきだ、どのように語られているかという点にこそ、この小説の最も重要な部分がある——私はそう考えた。そこから私の美味しい小説の授業は始まる。

### 村上春樹「青が消える」の場合

村上春樹の短篇小説「青が消える」は、ソフトな管理が徹底し、人々の対社会的な不満が大きくなる前に、その不安の芽

が未然に摘み取られてしまう「もう一つの世界」を描いた小説で、短いながらも村上春樹らしいユーモアに満ちた小説である。管理社会には監視が付きものであるが、この小説に描かれた社会にはそのような露骨な監視はない。だが、「駅員」の応対に明らかのように、「中央コンピュータ」の支配は社会の隅々にまで行き渡っている。注目すべきは小説の結びの次の言葉である。

でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。そしてそれは僕が好きな色だったのだ。

誰も消えた青のことなんか気にしていない。監視され、管理されていることに気づいていない(少なくともそのように見える)。「僕」がそれに気づいてしまうのは、「僕」は「青」が好きだったからだ。「青」へのこだわりが、変化に気づかない人々の中で「僕」一人を目覚めさせている。二十一世紀型管理社会の到来を警告するという極めて政治的なテーマを扱いながらも、この小説が、PO Pな感覚、ある種の軽さを失わないのは、「不満を抱く存在」として、政治とは程遠い個人、「青」が好きな「僕」を置いたことよっている。「僕」はただ

「青」が好きなだけで、何か政治的な主張をしているわけではない。だが、好きなものを好きであると表明すること、好きであり続けられるということ、それ以上でもそれ以下でもないところに、管理的な圧力から身を守る最後の牙城があるのかも知れない。もしも「青が消える」が「赤が消える」であつたら、小説はたちまち政治的言説に飲み込まれ、小説としての足場を失っていたかも知れない。

時代への警告を発するにしても、作家には作家のやり方がある。アイロンがけをする「僕」の「青」への愛着とこだわりが、すべてを飲み込んでいこうとする巨大な力に対して、ささやかな抵抗を試みている。「壁と卵」の作家は、そのささやかな抵抗に寄り添い、味方しようとする。「壊れやすい卵」の側に立つのである。「青」への愛着は、かけがえのない個性への愛である。皆それぞれの「青」を大切にすべきなのだ。そしてアイロンがけを楽しむべきなのだ。そんなことを生徒に向かって話してみたい。

さあ、教室へ行こう。そこにもかけがえのない個性が待っている。私もまた、「卵」の側に立つのだ。

(やすだまさのり・名古屋市立富田高等学校)